

	一般的名称	報告の概要
408	ヒトインスリン(遺伝子組換え)	経口抗糖尿病薬、ヒトインスリンおよびインスリンアナログが固形癌の発症リスクに与える影響を検討するため、62,809例の患者を対象に、メトホルミンまたはスルホニル尿素の単独療法、併用療法、インスリン療法の4群間で比較したレトロスペクティブコホート研究において、スルホニル尿素の単独療法およびインスリン療法はメトホルミンの単独療法と比較して、大腸癌及び膵癌の発症リスクが増加した。
409	ヒトインスリン(遺伝子組換え)	1991年～1996年にメトホルミンあるいはSU剤を新規に使用開始した患者12,272例を対象とし、メトホルミン使用開始群とSU剤使用開始群にわけてすべての症例について最大9年間の追跡調査を行ったところ、メトホルミン使用群に比べSU剤使用群において癌関連死亡の危険率が高かった。また、両集団においてインスリン使用はインスリン未使用と比較して癌関連死亡の危険率が有意に高かった。
410	塩酸テモカプリル	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
411	塩酸キナプリル	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
412	塩酸イミダプリル	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
413	ベシル酸アムロジピン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
414	ニトレンジピン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
415	塩酸ジルチアゼム	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
416	塩酸テラゾシン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
417	メシル酸ドキサゾシン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
418	塩酸ベタキソロール	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
419	塩酸ブフェトロール	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。

	一般的名称	報告の概要
420	塩酸ベニジピン	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、 $\beta$ -遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。
421	デュタステリド	デュタステリドの二つの大規模無作為化試験において、デュタステリドと $\alpha$ ブロックカーを併用した場合、心不全の発現率が高くなる結果が得られた。
422	塩酸メホルミン	2000年を境としてスウェーデン毒物情報センターの緊急電話応答サービスに寄せられたメホルミンによる中毒症状(乳酸アシドーシス)に関する問い合わせ件数が増加しており、2000年には9件であったものが2008年には102件となった。
423	リスベリドン	オランザピン、クエチアピン、リスベリドン投与開始した統合失調症患者におけるブドウ糖代謝の変化を無作為化可変用量試験で比較した結果、24週目の経口ブドウ糖負荷試験における血糖値0-2時間曲線下面積は、ベースラインからオランザピン群とリスベリドン群で有意に増加した。またインスリン感受性指数は、オランザピン群及びリスベリドン群で有意に低下した。
424	シクロスポリン	腎移植後においてシクロスポリンを投与された女性患者50例、腎移植後にシクロスポリンを投与されていない女性患者51例および腎移植実施歴のない女性181例の3群を比較した結果、乳腺線維腺腫の発現はそれぞれ14%、2%、2.8%であり、シクロスポリン投与群の有病率は他群と比較して有意に高かった。
425	パクリタキセル	閉経前乳癌患者に対して行われた単剤術前化学療法100例について、術前化学療法が無月経および閉経に及ぼす影響について調べた結果、無月経発生率は、パクリタキセル91.2%、エピルビシン57.1%、ドセタキセル91.1%であり、関連する有意な因子は年齢、薬剤、術前化学療法の完遂であった。
426	アダリムマブ(遺伝子組換え)	非感染性眼炎症患者7957例を対象に、免疫抑制剤の投与による死亡率及び癌死亡率の関連性についてレトロスペクティブコホート研究を行った結果、TNF阻害剤投与群において死亡率・癌死亡率の有意な上昇が認められた。
427	برانلカスト水和物	برانلカスト水和物を服用した妊婦における胎児への影響を調査したところ、器官形成期の妊婦24例中、停留卵丸1例、心室中隔欠損1例が認められた。
428	クラリスロマイシン	10例の健康人を対象に、クラリスロマイシンのトラゾドン・ゾルピデムに対する薬物動態学的・薬力学的相互作用について調べた結果、クラリスロマイシンとトラゾドンの同時投与によって、トラゾドンのAUC、Cmaxの上昇と半減期の延長が生じ、トラゾドンの作用が強くなることが示された。
429	アムロジピンベシル酸塩・アトルバスタチンカルシウム水和物配合剤	IFN $\beta$ -1aによる治療で安定している再発寛解型多発性硬化症(MS)患者へのアトルバスタチン併用投与の安全性について、プラセボと比較した結果、併用投与はMS活性リスクを増大させ、新規MS病変発現および臨床的再発が有意に高かった。
430	塩酸イリノテカン	イリノテカンによる治療を受けている結腸直腸癌患者96例を対象とした、UGT1A1*28及びc.-3156G>Aの遺伝子多型と重度の下痢との関連に関するプロスペクティブコホート研究において、UGT1A1*28を2コピーもしくはc.-3156G>Aを2コピー有する患者において下痢のリスクが有意に高かった。
431	リファンピシン	CYP3AおよびCYP2D6により肝臓で代謝されるオキシコドンを経口投与した場合に、オキシコドンの薬理学的効果を検討する試験において、リファンピシンはオキシコドンのAUC曲線を53%、86%減少させ、経口投与でのバイオアベイラビリティは69%から21%に減少した。

	一般的名称	報告の概要
432	ジクロフェナクナトリウム	NSAIDsの使用と心血管イベントのリスクについてコホート研究を行った結果、COX-2選択的阻害薬及びジクロフェナク使用群では、死亡及び心筋梗塞の発生リスクが非使用群に比べて高く、また、用量依存的にリスクが高くなった。
433	エポエチンβ(遺伝子組換え)	頭頸部癌患者に対し化学療法の併用を含む放射線療法とエリスロポエチン製剤を使用した場合の予後についてメタアナリシス解析した結果、エリスロポエチン併用群では放射線療法のみ群と比較して全生存期間およびLocal regional progression free survivalが有意に悪化した。
434	メトトレキサート	脳転移を有する乳癌患者50例を対象にcarmustineとメトトレキサートの併用療法の有効性と安全性を検討したところ、死亡例が2例認められ、Grade3~4の貧血・好中球減少症・血小板減少症・疲労が認められた。
435	メトトレキサート	新たに急性リンパ性白血病と診断された小児498例を対象に、初期治療にメトトレキサート、寛解導入療法にprednisone、ビンクリスチン、ダウノルビシン、アスパラギナーゼを用いて、予防的全脳放射線照射を治療から除外可能かを調査する臨床試験を行った結果、死亡例として寛解導入中の敗血症2例、併用治療中の虫垂炎1例、再導入中の細菌性敗血症2例、肝不全1例、継続治療中の敗血症1例が認められた。
436	イトラコナゾール	オランダ医薬品安全性監視センターLarebにおいてイトラコナゾールと肺炎の関連性についてのシグナルを検出した。オランダ医薬品安全性監視センターに報告された4例の他、WHOのモニタリングセンターには37例、Eudravigilanceのデータベースに15例の報告を受けていることがわかった。
437	塩酸ノギテカン	2次化学療法としての再発小細胞肺癌に対する経口塩酸ノギテカンと静注ペバシズマブ併用療法の第II相試験において、リスク・ベネフィット分析を実施した結果、経口塩酸ノギテカン単独投与群に比べて、ペバシズマブ併用群においてグレード3~5の重篤な感染症のリスクの増大が認められた。
438	オキサリプラチン	切除術後のステージIIもしくはIIIの結腸癌患者2246例を、術後療法としてLV5FU2を行った群とFOLFOX4を行った群に無作為に割り付けた試験において、二次癌がLV5FU2群で6.1%、FOLFOX4群で5.1%発現した。
439	エストラジオール	50~79歳のデンマーク人女性909,946例を対象としたプロスペクティブコホート研究において、ホルモン療法を受けたことがない女性と比較するとホルモン療法を受けている女性の卵巣癌罹患率は1.38倍であった。
440	リンゴ酸スニチニブ	ヘミ接合体rasH2トランスジェニックマウスを用いたリンゴ酸スニチニブの6ヶ月がん原性試験の結果、25 mg/kg/day以上を投与した群のメスにおいて、同系統のマウスで自然発生する血管肉腫の発生頻度が上昇し、75もしくは50 mg/kg/dayを投与した群では胃十二指腸の腫瘍が認められた。また、以前に同マウスで行った1ヶ月がん原性試験で200 mg/kg/day投与群に認められていた胃粘膜肥厚が本試験の25 mg/kg/day投与群で確認された。
441	レフルノミド	妊娠初期にレフルノミドに暴露された影響を新生児の先天異常の発現率において評価するため、レフルノミドを服用し、関節リウマチと診断された妊婦64例の患者群、妊娠中にレフルノミドを服用せず、催奇形性物質に暴露されていない関節リウマチと診断された妊婦108例の比較群、および、関節リウマチおよび他の自己免疫疾患と診断されておらず、催奇形性物質に暴露されていない健康な妊婦78例の比較群の3群間で比較したところ、先天異常の発現率に有意な差は認められなかった。
442	レボホリナートカルシウム	未治療の胃癌患者48例に対してオキサリプラチンに続いてロイコボリンおよび5-フルオロウラシル持続注入を2週間毎に投与した試験において、47例中、1例が感染合併症で死亡し、Grade3~4の好中球減少症が36.1%発生した。
443	マレイン酸フルボキサミン	30才以上の非糖尿病患者において、抗うつ薬と糖尿病のリスクの関連について症例対照研究を行った結果、過去2年間抗うつ薬を使用しなかった場合と比べ、最近24ヶ月以上中・高用量の抗うつ薬を使用した場合、糖尿病のリスクが上昇した。

	一般的名称	報告の概要
444	ジクロフェナクナトリウム	人工股関節全置換術中の出血に及ぼす非ステロイド性抗炎症薬の影響について、手術前2週間にジクロフェナク(18例)、rofecoxib(17例)、プラセボ(16例)を服用した群で調査した結果、手術後重篤な有害事象によりそれぞれ6例、5例、2例が試験を中止した。ジクロフェナク投与群の平均出血量はプラセボ群と比べ32%増加し、rofecoxib投与群では7%増加した。
445	エストラジオール	ホルモン避妊薬(HC)による静脈血栓塞栓症(VTE)の発現と鎌状赤血球形成傾向(SCT)との関連について検討した結果、VTE発症群は未発症群と比べHC使用者が有意に多かった。また、SCTを有するHC使用者のVTE発症リスクは、SCTを示さないHC使用者に比べて有意ではないものの高かった。
446	マレイン酸フルボキサミン	30才以上の非糖尿病患者において、抗うつ薬と糖尿病のリスクの関連について症例対照研究を行った結果、過去2年間抗うつ薬を使用しなかった場合と比べ、最近24ヶ月以上中・高用量の抗うつ薬を使用した場合、糖尿病のリスクが上昇した。
447	塩酸リトドリン	母胎に投与された子宮収縮剤が新生児の骨代謝に及ぼす影響について、妊娠27-37週に分娩した単胎妊娠管理症例91例(塩酸リトドリン投与群、塩酸リトドリン+硫酸マグネシウム併用群)を対象に、母体血のCa値を比較した。その結果、塩酸リトドリン単独投与により母体Ca値の低下を認め、塩酸リトドリン+硫酸マグネシウム併用ではさらに低下した。
448	ポリコナゾール	ポリコナゾールの血中濃度モニタリングの有用性を評価するため、文献情報からメタ解析を行った試験において、6.0 µg/mLでcut off値とした場合では肝機能障害の発現率に有意な差が認められた。
449	ポリコナゾール	ポリコナゾールの血中濃度と肝機能障害発現リスクとの関連性について、文献調査から解析した結果、血中濃度と肝機能障害発現率との間に相関が認められた。
450	フルコナゾール	人工呼吸管理をした早産新生児を含む50例の新生児を対象に、ミダゾラムの新生児における効能・効果および用法・用量の評価を検討したところ、フルコナゾールがミダゾラムの血中濃度低下要因として認められた。
451	リスベリドン	統合失調症患者において、第2世代抗精神病薬の使用と死亡の関連を検討した結果、死亡のリスクは、ペルフェナジン投与群と比較して、クエチアピン投与群で最も高く、クロザピン投与群で最も低かった。
452	ニコチン	ニコチン補充療法(NRT)が冠動脈バイパス術(CABG)後の院内死亡率に及ぼす影響をレトロスペクティブに検討した結果、CABG後にNRTを受けた場合は、NRTを受けなかった場合あるいは非喫煙者と比較して死亡率の上昇が認められた。
453	エストラジオール	50~79歳のデンマーク人女性909946例を対象としたプロスペクティブコホート研究において、ホルモン療法を受けたことがない女性と比較するとホルモン療法を受けている女性の卵巣癌罹患率は1.38倍であった。
454	リスベリドン	スウェーデンの出生登録から、妊娠初期に抗精神病薬又はリチウムを使用した患者570人の子の奇形率を算出した結果、先天異常のリスクが有意に上昇した。その原因は主に心血管系異常(心房、心室中隔欠損)であった。
455	デカン酸ハロペリドール	スウェーデンの出生登録から、妊娠初期に抗精神病薬又はリチウムを使用した患者570人の子の奇形率を算出した結果、先天異常のリスクが有意に上昇した。その原因は主に心血管系異常(心房、心室中隔欠損)であった。

	一般的名称	報告の概要
456	酢酸テリパラチド	テリパラチドのラットにおける非臨床試験、ヒトにおける臨床試験・患者の治療歴を分析した試験において、重度の骨粗鬆症に対してテリパラチド投与を受けた患者において、2例目の骨肉腫発症が報告された。
457	ヨード化ケン油脂肪酸エチルエステル	肝細胞癌患者に対する肝動脈化学塞栓療法(TACE)、経皮的エタノール注入療法(PEI)/ラジオ波焼灼療法(RFA)、TACE/PEI又はTACE/RFA併用療法について調査した結果、TACE群では急性胆嚢炎及び肝不全が、PEI/RFA群では腹腔内出血及び針穿刺経路播種が、併用群では胆汁性嚢胞、腹腔内出血及び肝不全が主に発現した。
458	ヒトインスリン(遺伝子組換え)	465人の肝細胞癌患者を対象としたレトロスペクティブケースコントロール研究において、インスリンを使用している糖尿病患者で発癌リスクの上昇が示唆された。
459	硫酸アミカシン	アミノグリコシド系薬剤関連性腎毒性の発現率とリスク要因を検討するために、アミノグリコシド系薬剤療法を開始している360例を評価したところ、209例にアミドグリコシド系薬剤関連性腎毒性が発現した。
460	塩酸ドキシソルピシン	非転移性骨肉腫患者71例に対して、メトレキサート、シスプラチン、ドキシソルピシン、イホスファミドで治療した試験のデータを、性差および年齢差による副作用発現の違いについて解析した結果、女性および4-14歳の小児においてグレード4の好中球減少症、血小板減少症、発熱性好中球減少症の発現率が有意に高かった。
461	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	45歳以下の女性の生活因子・妊娠歴・経口避妊薬使用とエストロゲン受容体・プロゲステロン受容体・ヒト上皮増殖因子陰性の乳癌発症リスクとの関連性について、2つの母集団ベースのケースコントロール研究から調査した結果、1年以上の経口避妊薬使用による乳癌の発症リスクが2.5倍、40歳以下では4.2倍となることが示された。
462	ジクロフェナクナトリウム	NSAIDsの使用と心血管リスクについて、基礎疾患として心不全のある患者で調査した結果、NSAIDsの使用により、死亡、心筋梗塞、心不全のリスクが有意に上昇し、死亡及び入院のリスクは用量依存的に上昇することが示された。
463	エストラジオール	乳腺腫瘍形成モデルラットを17β-エストラジオール(E2)またはE2+ブチル化ヒドロキシアニソール(BHA)で処理したin vivoの検討において、E2+BHA処理のラットにおける腫瘍発生率は24%であるのに対し、E2処理のラットでは82%と高かった。エストロゲンを介する酸化ストレスは、エストロゲン依存性乳癌の発現に寄与していることが示唆された。
464	インフリキシマブ(遺伝子組換え)	22歳以下の患者のうち、18歳以下でのインフリキシマブ暴露歴のある患者で20件の悪性腫瘍が報告されているが、インフリキシマブ以外にも免疫抑制療法の併用や合併の自己免疫疾患などが発現要因として考えられた。
465	塩酸オクスプレノロール	β遮断薬未使用の患者において、非心臓手術の周術期にβ遮断薬を使用した際のリスクをメタアナリシスで評価した。結果、プラセボと比較して心筋梗塞発現は減少したが、卒中発作発現は有意に増加し、死亡率の増加傾向が見られた。
466	クエン酸タモキシフェン	1298例の乳癌患者を対象に、CYP2D6阻害活性を有する薬剤とタモキシフェンの併用と、乳癌再発率との関連性をレトロスペクティブに解析した結果、タモキシフェン単独群に比べ、CYP2D6阻害剤併用群で2年間乳癌再発率が1.9倍高かった。CYP2D6阻害剤併用群のうち、中程度-強力なCYP2D6阻害作用を有する選択的セロトニン再取り込み阻害剤(セルトラリン・パロキセチン・fluoxetine)併用群の乳癌再発率はタモキシフェン単独群の2.2倍であった。
467	ヨード化ケン油脂肪酸エチルエステル	ウサギの門脈圧亢進症モデルに、シスプラチン/本剤(CDDP/Lip)を肝動脈内投与して血小板数の変動を検討したところ、門脈部分結紮により軽度低下した血小板数はコントロールでは変化しなかったが、CDDP/Lip投与により有意に減少した。

	一般的名称	報告の概要
468	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	原発性肝細胞癌患者8例に対し、主腫瘍・門脈腫瘍栓のみの超選択的塞栓術併用シスプラチン/本剤(GDDP/Lip)動注療法を行ったところ、3例で血小板減少(grade2)が認められ、全例で一時的な肝障害(grade1)および腹水が認められた。
469	塩酸クロカプラミン	抗精神病薬を開始した66歳以上の糖尿病患者において、抗精神病薬と高血糖のリスクをケースコントロールデザインで検討した結果、抗精神病薬の開始により、高血糖による入院のリスクが有意に上昇した。このリスクは治療の初期過程において高かった。
470	デカン酸ハロペリドール	スウェーデンの出生登録から、妊娠初期に抗精神病薬又はリチウムを使用した患者570人の子の奇形率を算出した結果、先天異常のリスクが有意に上昇した。その原因は主に心血管系異常(心房、心室中隔欠損)であった。
471	ホリナートカルシウム	直腸腺癌患者177例をUFT/LVと放射線療法を併用したネオオジュバント化学放射線療法(CRT)90例および放射線単独療法(RT)87例に無作為に割り付け、第III相試験を行った結果、グレード4の下痢がCRT群で発現し、死亡がCRT群で1例、RT群で3例認められた。
472	レボホリナートカルシウム	イリノテカンおよびオキサリプラチン難治性の転移性大腸癌患者52例に対してセツキシマブ、イリノテカン、5-FU、ロイコボリンで治療を行った結果、1例が敗血症を伴う好中球減少症により死亡した。
473	レボホリナートカルシウム	再発または転移性胃腺癌患者に対してイリノテカン/オキサリプラチン併用療法(I0)もしくはオキサリプラチン/フルオロウラシル/ロイコボリン併用療法(FOLFOX4)を無作為に行った結果、各群1例ずつ死亡した。また、グレード3/4の嘔吐、下痢、好中球減少、発熱性好中球減少がI0群で、貧血、グレード2の神経毒性がFOLFOX4群で高頻度に発症した。
474	レボホリナートカルシウム	病期Ⅲの大腸癌患者3018例に対する術後補助療法として、フルオロウラシル/ロイコボリンの投与に加えてイリノテカン投与群と非投与群に無作為に割り付けた試験において、イリノテカン投与群で、グレード3/4の消化管関連有害事象および好中球減少の発現率が上昇し、イリノテカン非投与群の3例で死亡が認められた。
475	アスピリン・ダイアルミネート	冠動脈ステントを留置しアスピリンとクロピドグレルで抗血栓療法を受ける1348人において、心有害事象(死亡、心筋梗塞、標的部位での血管再建術)、大出血(頭蓋内出血、眼内出血、後腹膜出血)、局所血腫と男女差との関連を調査した結果、心有害事象及び大出血は男女で差が見られなかったが、ステント留置30日後の血腫の発現率は女性は22%、男性は5.8%であった。
476	アルプロスタジル	プロスタグランジンE1製剤を用いた動脈管依存性先天性心疾患患者258例を対象とし、低ナトリウム血症に関して後方視的に検討したところ、低Na血症は中等度79例、重度47例であった。また、低出生体重、早産児、心房性ナトリウム利尿ペプチド高値例で低Na血症を来しやすい傾向にあった。
477	アセトアミノフェン	アセトアミノフェンと喘息又はアレルギー性鼻炎との関連を分析するため、18617人を年齢ごとに3群(6-7歳、13-14歳、20-44歳)に分け、アンケート形式で調査を行った結果、少なくとも月1回以上アセトアミノフェンを使用した場合、3群とも喘鳴、日中安静時の息切れ発作、アレルギー性鼻炎の発現のリスクは有意に上昇した。
478	アセトアミノフェン	アセトアミノフェンと喘息又はアレルギー性鼻炎との関連を分析するため、18617人を年齢ごとに3群(6-7歳、13-14歳、20-44歳)に分け、アンケート形式で調査を行った結果、少なくとも月1回以上アセトアミノフェンを使用した場合、3群とも喘鳴、日中安静時の息切れ発作、アレルギー性鼻炎の発現のリスクは有意に上昇した。
479	デカン酸ハロペリドール	静脈血栓症のリスクファクターのない患者において抗精神病薬の使用と肺塞栓症の関連をケースコントロールスタディで検討した結果、非使用群と比べて現在抗精神病薬を使用している患者で有意にリスクの上昇が認められた。定型抗精神病薬のうち、低力価抗精神病薬服用患者で最もリスクが上昇した。

	一般的名称	報告の概要
480	酒石酸トルテロジン	高齢者による抗コリン作用を有する薬剤の使用と認知機能低下・認知症のリスクについて、65歳以上の4,128例の女性および2,784例の男性を対象に前向きコホート研究を行った。その結果、抗コリン薬を使用している高齢者は認知低下や認知症の発症リスクが増大し、使用中によりリスクが減少することが示唆された。
481	トピラマート	トピラマートの急速漸増投与法(50mg/日で開始し、1,2週間ごとに50mgずつ増量)とうつ病の既往(HxDEP)、熱性痙攣の病歴(FS)及び海馬硬化(HS)等のうつ病発症のリスク因子との関連についてレトロスペクティブな解析を行った結果、急速漸増投与法は通常漸増投与法と比較して、うつ病発症のリスクが5倍高かった。また、急速漸増投与法によりうつ病発症のリスクは、FSでは12.7倍、HxDEPでは23.3倍、およびHSでは7.6倍増加した。
482	メトトレキサート	二次性の悪性腫瘍(SMN)リスクに対するメルカプトプリン/メトトレキサート維持療法の潜在的な影響を探索するため、Nordic Society for Paediatric Haematology and Oncology急性リンパ性白血病-92プロトコールに準拠した治療を受けた急性リンパ芽球性白血病小児患者1,614例中、20例にSMNが発現が認められた。
483	プロピオン酸クロベタゾール	アトピー性皮膚炎(AD)と局所糖質コルチコイド(TCS)および局所カルシニューリン阻害剤の使用とリンパ腫発生リスクとの関連について検討したケースコントロール研究において、TCS使用によるリンパ腫発症リスクの増加が認められ、TCSの力価と投与期間に依存して増加することが示された。
484	ミダゾラム	エファビレンツの単回投与によるCYP3A4の影響を調べるため、健康な男女各6人にCYP3A4の基質であるミダゾラムを1、8、13、18、23、29日目に投与、エファビレンツを7日目に投与し、ミダゾラムとその代謝体の血中濃度変化を調査した。その結果、ミダゾラムのAUCは1日目に比べ8日目、13日目では有意に減少した。
485	リン酸オセルタミビル	英国にて、学校における公衆衛生措置についての知見を得るため、リン酸オセルタミビルの予防投与の効果と副作用発現率について、11-12歳の児童を対象に調査した結果、体調不良33.2%、頭痛24.3%、腹痛21.1%、疲労感17.0%、嘔吐10.9%、集中困難7.7%、下痢6.9%、皮疹1.2%であった。
486	リン酸オセルタミビル	2009年4-5月にインフルエンザA(H1N1)ウイルス確定例のあったロンドンの小中学校の児童を対象に、リン酸オセルタミビルの予防投与状況と副作用に関するオンライン調査を行った結果、オセルタミビル予防投与の児童85例中45例(53%)で副作用が認められ、40%で消化器障害が、18%で精神神経系障害が認められた。
487	メルカプトプリン	二次性の悪性腫瘍(SMN)リスクに対するメルカプトプリン/メトトレキサート維持療法の潜在的な影響を探索するため、Nordic Society for Paediatric Haematology and Oncology急性リンパ性白血病-92プロトコールに準拠した治療を受けた急性リンパ芽球性白血病小児患者1614例中、20例にSMNが発現が認められた。
488	非ピリン系感冒剤(4)	アセトアミノフェンと喘息又はアレルギー性鼻炎との関連を分析するため、18617人を年齢ごとに3群(6-7歳、13-14歳、20-44歳)に分け、アンケート形式で調査を行った結果、少なくとも月1回以上アセトアミノフェンを使用した場合、3群とも喘鳴、日中安静時の息切れ発作、アレルギー性鼻炎の発現のリスクは有意に上昇した。
489	セレコキシブ	1,660例を対象としたセレコキシブの腺腫予防に関するセレコキシブ無作為化試験において、CYP2C9*2(R144C)およびCYP2C9*3(I359L)の遺伝子多型を有する患者群において心血管系障害、腎障害、高血圧等のリスクの有意な増加が認められた。
490	エストラジオール	卵巣切除ラットにあらかじめ性ホルモン依存性腫瘍を誘発する化学発癌物質を投与した後に、17ベーターエストラジオール(E2)を投与した試験において、E2投与群では非投与群と比べて腫瘍数の有意な増加が見られた。
491	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	n-プサルシアノアクリレート-ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステルを用いた豚4頭の上腸間膜動脈領域への塞栓術の結果、腸管は5分以内に肉眼的色調変化を認め、リビオールの割合が高いほど色調変化が強い傾向が見られ、血流障害の程度が強くなった可能性が示唆された。

	一般的名称	報告の概要
492	塩酸ポリドロニウム	3種のマルチパーパスソリューション(MPS)と4種のシリコンハイドロゲルコンタクトレンズ(SHCL)の組み合わせと角膜ステイニングの程度について調査した結果、SHCLの種類によらず、塩化ポリヘキサニドを含むMPS-3を使用した場合に、塩化ポリドロニウムを含むMPS-1、塩化ポリヘキサニドを含むMPS-2よりも有意に角膜ステイニングの発生とその重症度が高かった。
493	染毛剤	28歳、原疾患として気管支喘息、アトピー性皮膚炎のある女性。本剤使用後に顔が腫れ、喘息重積発作、皮膚痒痒症、蕁麻疹を発現し、救急搬送された1例(本製品使用前にパッチテストは行っていない)。点滴処置を行い8時間後に軽快、退院。その後、血液検査及び皮膚検査を行ったが、本製品によるアレルギー反応と言える原因は認められなかった。併用していた薬剤にアスピリンあり。
494	塩酸ポリヘキサニド	右眼にアcantアメーバ角膜炎を発現した1例。角膜に痛みがあり、角膜上皮混濁、角膜実質浸潤、結膜充血と診断(視力は5/20)され、治療後、患者視力は10/20に回復した。本製品がアcantアメーバ角膜炎のリスクファクターである可能性が示唆された。
495	染毛剤	59歳女性。これまで頭皮にトラブルを起こした経験はなく、アレルギー歴もない。本製品使用後に顔面の腫れ、痒み、赤み、頭皮にブツブツを発現し入院され、点滴処置を行い5日後に軽快した。なおパッチテストは行っていない。
496	シャンプー	本剤を3回ほど使用したところ、家族4人全員が首に発疹を発現した。うち、小学生女兒は、約2週間後に発熱と全身の発疹のため入院。その後、回復。



No.	感染症(PT)	出典	概要
1	A型肝炎	Eurosurveillance 2009; 14: 19091	チェコ共和国PHPAIによると、2008年にA型肝炎確定症例が1616例報告されたが、これは2003～2007年までの年間平均報告数153例(70～322例)と比べて10.6倍であった。この感染拡大は、初期には薬物静注濫用者と関係しており、約1/4の症例はヒト-ヒト感染によるものと考えられたが、年の後半では恐らく長期間に亘るA型肝炎罹患率の低下で感受性の増大した一般住民において拡大したと考えられた。
2	A型肝炎	Vox Sanguinis 2009; 96: 14-19	加熱及び高静水圧の物理的不活化処理法で4株のA型肝炎ウイルスの不活化を行ったところ、それぞれの処理はHAV感染性を3～5log10の範囲で低下させた。また、血液製剤のウイルス汚染に対する安全性を評価するのにもっとも適した株は、耐熱性のKRM238であった。
3	B型肝炎	Transfusion Med. 2008; 18: 379-381	日本における、不顕性HBV感染者(HBsAg陰性)からの輸血によるB型肝炎感染に関する報告。
4	B型肝炎	日本肝臓学会第37回東部会 O-85	日本の首都圏において、HBVの中でも慢性化率の高いgenotypeAは急速に増加しており、新規日本人キャリアからの二次感染が疑われることが急性B型肝炎症例の検討から明らかになった。
5	B型肝炎	日本小児感染症学会第40回総会・学術集会 E-20	母親がHBsAg陰性かつ家族内に患者以外のHBVキャリアが存在する成人及び小児HBVキャリアである7家族を対象とし、HBV全遺伝子解析に基づく分子系統樹を用いて感染源を検索したところ、3家族で父親以外の感染源の可能性があり、祖母からの感染は分子疫学的に感染経路を証明できた。
6	B型肝炎C型肝炎	ProMED-mail20081201.3773	パキスタンSindh地方、BadinにおいてB型及びC型肝炎が増加している。Badin及びその周辺の村では45%が罹患している。理由は、基本的な医療設備の不足、シリンジ使い回し、肝炎ウイルス検査無しの輸血と述べられている。
7	B型肝炎C型肝炎	日本輸血細胞治療学会誌 2009; 55: Y-1-2	2004～2007年の4年間に確認された輸血ウイルス感染症は、HBV50例、HCV3例、HEV4例、ヒトパルボウイルスB19が4例である。輸血細菌感染症はRC-MAPによるY. enterocolitica感染2例、PGによるS. aureus感染1例であった。
8	C型肝炎	第32回 日本血液事業学会総会	1999年7月～2008年3月までにNATで検出された111本のHCV-RNA陽性検体のGenotype解析の結果、Genotype 2aが最も多く、1bと2bがほぼ同数であった。
9	C型肝炎	日本輸血細胞治療学会誌 2009; 55: O-054	本邦で20プールNAT導入後、NAT陰性献血血液由来の血液製剤からHCV感染が初めて報告された。
10	E型肝炎	AABB Annual Meeting and TXPO 2008	2005～2007年に北海道で実施したプールNATによるHEV-RNAスクリーニングの結果、献血者の約1/8,300はHEV-RNA陽性であった。ほとんどの献血者は動物内臓を摂取しており、無症候性であったが、ウイルス血症は数ヶ月間持続した。
11	E型肝炎	Clin Infect Dis 2009; 48: 373-374	急性白血病の33歳の男性がE型肝炎を発症し、HEV遺伝子検査の結果、重複する時期に同じ病棟に入院していた別のE型肝炎患者から感染していたことが示唆された。
12	E型肝炎	Transfusion 2008; 48: 2568-2576	日本全国でALT高値のため献血不適となった献血者の血液検体に、HEVマーカー(HEV-RNA及び抗HEV抗体)が認められ、いずれのマーカーとも東日本の方が西より高かった。
13	E型肝炎	日本ウイルス学会第56回学術集会 2P021	HEV Genotype3型の感染が確認されている豚舎周辺のドブネズミの感染保有状況の調査。9/56匹のドブネズミからHEV-RNA(Genotype3)が検出され、11/56匹からHEV抗体が確認された。
14	E型肝炎	日本ウイルス学会第56回学術集会 2P022	タイの養豚場における齧歯類のE肝ウイルスの検出。養豚場に生息するラットから、ブタから分離されたHEV-RNAと一致するHEV-RNAが分離された。ラットがE型肝炎ウイルスを蓄積する宿主となっている可能性がある。
15	HHV-8感染	Transfusion 2008; 48: Supplement 105A	米国の供血者のヘルペスウイルス8(HHV8)ゲノム陽性率について、高感度定量RT-PCR法(検出限界8コピー)より684名の検体を分析したがHHV8ゲノムは検出されず、健康な供血者におけるHHV8陽性率は非常に低かった。
16	HIV	Eurosurveillance 2008; 13(50): 19066	ヨーロッパにおいて報告された人口100万人当たりの新規HIV感染率は、2000年以降ほぼ2倍となった。2007年は、当該地域53か国中49か国から合計48,892例のHIV感染が報告され、エストニア、ウクライナ、ポルトガルとモルドバ共和国で感染率が最も高かった。
17	HIV	Lancet 2008; 372: 1791-1793	2007年、中国におけるHIV感染者70万人、AIDS発症者8万5千人と推定。

No.	感染症(PT)	出典	概要
18	HIV	Nature 2008; 455: 609-611	2007年10月、中国におけるHIV感染者は70万人を記録。以前は感染有病率は0.04~0.07%と低推移を示していたが、2006年以降は8%と増加し、雲南、新疆は4~6万人、広西、広東は3~4万人を記録している。
19	HIV	Retrovirology 2008; 5: 103	シエラレオネ共和国から米国への移民男性においてHIV-2の新たなグループ(HIV-2-NWK-08F)が分離された。シエラレオネのサル的一种で確認されているサル免疫不全ウイルスと系統的に類似している。感染者はサル接触歴、刺青、針刺し、輸血歴もなくヒト-ヒト感染が疑われている。
20	インフルエンザ	CCDR Fluwatch 2008-2009 week09	カナダにおける季節性インフルエンザ流行状況報告。米国で、ブタインフルエンザA(H1N1)のヒトへの感染例が1例報告されたことも述べられている。
21	インフルエンザ	CDC Weekly Report/flu summary update 2009 Mar 6	米国アイオワ州で、2009年2月22~28日に、ブタインフルエンザA(H1N1)のヒトへの感染例が1例報告された。
22	インフルエンザ	CDC Weekly Report/flu summary update week08	2009年2月22日から28日の8週間において、米国での季節性インフルエンザ発生は概ね前の週と同じ水準であった。インフルエンザA(H1, H3, unsubtype)およびBについて、米国地域ごと、週ごとに比較検討した報告。
23	インフルエンザ	CDC/MMWR 2009; 58: 115-119	米国におけるインフルエンザの活動性に関する報告。2008年12月にサウスダコタにおいてブタインフルエンザA(H1N1)に感染した症例1例(19歳)に関する報告。
24	インフルエンザ	CDC/MMWR 2009; 58: 1-3	2009/4/17米CDCはカリフォルニア南部の小児2例の熱性呼吸器疾患をブタインフルエンザA(H1N1)感染であると特定した。アマンダジン、リマンダジンに抵抗性があり、2症例から検出されたウイルスは、米国やそれ以外の国でも報告されたことがないブタ又はヒトインフルエンザウイルスの遺伝子片を併せ持っていた。いずれの小児もブタとの接触はなく、感染源は不明である。
25	インフルエンザ	CDC/MMWR 2009; 58: 369-374	新規のインフルエンザAウイルスに関して、2009年2月28日にアイオワ州からブタインフルエンザA(H1N1)の3歳男児への感染例が報告された。ブタへの密接な接触が確認されている。男児は回復している。米国における今シーズン3例目のブタインフルエンザ感染例である。
26	インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2008; 14: 1470-1472	米国で2005年12月にインフルエンザA型と診断された17歳少年の鼻洗浄検体から分離されたウイルスは、CDCで決定されたウイルスの全ゲノム配列から、ブタインフルエンザA(H1N1)トリプル再集合体ウイルス(A/Wisconsin/87/2005H1N1)と同定された。患者は発症の3日前にブタの屠殺を手伝っており、ブタの呼吸器分泌物が感染源として最も疑われた。
27	インフルエンザ	Eurosurveillance 2009; 14: 1-2	2008年11月8日、スペイン北東部、家内養豚場勤務の50歳女性がインフルエンザ様症状を発症し、ブタインフルエンザAH1N1が検出された。近縁者、同僚等での症状は認められていない。
28	インフルエンザ	ProMED-mail20090220.0715	スペインにおいて2008年11月、養豚場で働く50歳女性がインフルエンザ様症状を呈した。2009年1月13日国立インフルエンザ研究所より、ブタ由来のインフルエンザA(H1N1)の可能性があると報告された。
29	インフルエンザ	N Engl J Med 2009; 360: 2616-25	米国での2005年から2009年における調査の報告。3種(トリ、ヒトおよびブタ)が再集合したブタインフルエンザA(H1)ウイルスのヒトへの感染についての11症例の報告。
30	インフルエンザ	ProMED-mail20081125.3715	CDCはインフルエンザ活動性の最新情報で、ブタに数回接触後にブタインフルエンザA/H1N1ウイルスに感染したヒトについて報告した。CDCによると毎年約1例のブタインフルエンザ陽性ヒト症例がある。この患者は10月中旬に病気になる前、テキサス州保健サービスは報告しているが、詳細は不明である。患者の家族や接触者では発症しなかった。
31	インフルエンザ	Virus Res. 2009; 140: 85-90	中国のブタからヒト様H1N1インフルエンザウイルスが検出され、ブタがヒトにおけるパンデミックを引き起こす古典的なインフルエンザウイルス保有宿主である証拠が示された。
32	インフルエンザ	日本ウイルス学会第56回学術集会 2E05	タイで分離された豚インフルエンザウイルス12株の遺伝子について系統解析を行い、9つの遺伝型に区別された。
33	新型インフルエンザ	CBER 2009年4月30日	新型インフルエンザ(H1N1)の輸血を介した感染可能性について。輸血により季節性インフルエンザに感染した例はこれまで報告されたことが無く、新型インフルエンザについても報告されていない。現時点で、輸血のメリットは新型インフルエンザの理論的リスクをはるかに上回る。なお、血漿分画製剤については製造工程におけるクリアランスが十分であることが確認されている。

No.	感染症(PT)	出典	概要
34	新型インフルエンザ	CDC/NMWR 58(17):470-472 2009年5月8日	2009年4月24日、CDCはテキサス州とカリフォルニア州にて、ブタインフルエンザA(H1N1)ウイルス感染確定症例8例を報告した。米国患者から同定されたウイルスはメキシコ患者のものと遺伝的に類似していると確認された。4月24日移行、米国およびその他の国々においてブタインフルエンザA(H1N1)ウイルス感染症例は増加し続け、4月28日時点の米国症例の約半数(45例)はニューヨーク市の高校生と職員であった。
35	新型インフルエンザ	CDC 2009/06/26 Novel H1N1 Flu Situation Update	2009年6月25日までに米国で確認された新型インフルエンザA/H1N1感染確定例及び可能性例は27,717例であり、死亡例は127例である。
36	新型インフルエンザ	CDC/MMWR 2009; 58: 1-3 (dispatch)	ブタインフルエンザA(H1N1)ウイルスに感染した追加の6症例について、カリフォルニアのサンディエゴで3例、インペリアルで1例、テキサスのグアダルペで2例報告された。これらの患者から分離されたウイルスはメキシコの患者から分離されたウイルスと同じであった。
37	新型インフルエンザ	CDC/MMWR 58 (dispatch) 2009/4/30	2009年3月から4月上旬にかけてメキシコで呼吸器疾患のアウトブレイクが発生した。3月1日から4月30日までに合計1918例の重症呼吸器疾患症例が報告され、うち286例がインフルエンザA陽性、97例がRT-PCRにより新型インフルエンザA/H1N1と確定された。死亡例は合計84例が報告された。このインフルエンザウイルスはカリフォルニアの小児患者2例から同定されたウイルスと同一の株であることが判明した。
38	新型インフルエンザ	CIDRAP News 2009/04/24	2009年4月24日、CDCはメキシコでの致死的な呼吸器疾患症例から分離されたウイルスは米国の患者のブタインフルエンザA/H1N1株と一致したと発表した。米国での感染例は現在8例である。メキシコ政府の公式発表では、メキシコシティにおいて854例以上の肺炎患者が発生し、そのうち59例が死亡している。
39	新型インフルエンザ	Health Canada news release 2009/04/26	カナダ政府はカナダにおけるブタインフルエンザA(H1N1)のヒト感染を確認した。Nova Scotiaで4例、British Columbiaで2例であり、米国及びメキシコのブタインフルエンザA(H1N1)と同一株であった。
40	新型インフルエンザ	IBTimes 2009/05/09	新型インフルエンザA/H1N1感染例が国内で初めて確認された。米デトロイト発成田行きの飛行機に搭乗しており、帰国時に発熱等を呈していたため簡易検査を行い、A型インフルエンザ陽性反応が出たためRT-PCR検査を実施し、新型インフルエンザA/H1N1陽性が確認された。
41	新型インフルエンザ	IDWR 2009 第16 週	2009年4月29日現在、9カ国が合計148例のブタインフルエンザA/H1N1感染を公式に報告している。米国では91例の確定症例を報告しており、1名の死亡者がある。メキシコは7例の死亡例を含む26例の確定症例を報告している。他、オーストリア(1例)、カナダ(13例)、ドイツ(3例)、イスラエル(2例)、ニュージーランド(3例)、スペイン(4例)、英国(5例)である。
42	新型インフルエンザ	MHLW(平成21年4 月28日健康発 0428003号)	メキシコや米国で発生している豚インフルエンザ(H1N1)を、感染症法に規定する「新型インフルエンザ」と位置づける。
43	新型インフルエンザ	MMRW 2009; 58: 521-524	05~06年、06~07年、07~08年の季節性インフルエンザワクチン接種コホートの保存ペア血清を用いて、新型インフルエンザウイルスの交差反応性を検討した。18-64歳ではワクチン接種前に6~9%、60歳以上では33%が交差反応を示した。ワクチン接種後には交差反応を示した例が18-64歳で2倍程度に増え、60歳以上では全く増えなかった。
44	新型インフルエンザ	N Engl J Med 2009; 360; 2605- 15	4月15日から5月5日の間、米国の41州において、総計642症例からヒトにおける新規ブタインフルエンザA(H1N1)ウイルスの感染を確認した。
45	新型インフルエンザ	ProMED- mail20090723.260 3	カナダCFIAの検査員2名が、2009年4月下旬にAlbertaのブタにおけるインフルエンザアウトブレイクについて調査中にブタインフルエンザA/H1N1に感染したことが発覚した。カナダにおける最初の新型インフルエンザ感染例である。
46	新型インフルエンザ	Science 2009; 10.1126/SCIENCE .1176062	新型インフルエンザA(H1N1)ウイルスは世界中に急速に広まっている。パンデミックの可能性を判断するのはデータが限られているため難しいが、適切な保険対応を伝えるには必須である。メキシコでの大流行、国際的な広がりの早期情報およびウイルス遺伝的変異について分析することにより、感染力と重症度の早期評価を実施した。
47	新型インフルエンザ	WHO 2009年4月 28日	WHOは新型インフルエンザのPandemic Alertをフェーズ4に引き上げた。
48	新型インフルエンザ	WHO 2009年4月 29日	WHOは新型インフルエンザのPandemic Alertをフェーズ5に引き上げた。

No.	感染症(PT)	出典	概要
49	新型インフルエンザ	WHO 2009年6月11日	2009年6月11日、WHOは現在の新型インフルエンザのAlertをフェーズ6に引き上げた。
50	新型インフルエンザ	WHO Disease Outbreak News 2009年6月24日	2009年4月24日以降、米国及び他の国々における新型インフルエンザA/H1N1感染症例は増加し続け、6月24日現在WHOに報告された確定症例数は累計55867例(死亡238例)である。米国は21449例(死亡87例)、メキシコは7847例(死亡115例)、ブラジルは334例(死亡0例)。
51	新型インフルエンザ	WHO/EPR 2009年4月24日, 2009年4月27日 WHO/Media centre 2009年4月27日	・米国、メキシコにおけるインフルエンザ様疾患について:米国政府は米国内の7人の豚インフルエンザA/H1N1確定症例(5人がカリフォルニア、2人がテキサス)と9人の疑いがある症例を報告した。死亡症例は報告されていない。メキシコ政府は3つの別々の事例を報告しており、メキシコ連邦区ではインフルエンザ様疾患が挙がり始め、4月23日までに854人以上の肺炎が発生し、うち、59人は死亡している。 ・豚インフルエンザupdate3:豚インフルエンザA(H1N1)の発生状況は刻々と変化しており、2009年4月27日現在、米国では40症例(死亡例なし)、メキシコでは7症例の死亡を含む26症例で同ウイルスへの感染が確認された。 ・豚インフルエンザ:国際保健規則(2005年)の元設立された緊急委員会が2009年4月27日、2回目となる会合を開催した。
52	新型インフルエンザ	WHO/EPR update6 2009年4月30日	2009年4月30日現在、11の国がインフルエンザA(H1N1)に感染した257の症例を公式に報告した。
53	新型インフルエンザ	WHO/EPR 2009年5月21日	2009年5月21日現在の世界における新型インフルエンザ(H1N1)感染状況。41カ国、11034例(死亡85例)が確定されている。
54	新型インフルエンザ	WHO/WER 2009; 84: 173-184	新型インフルエンザ(H1N1)が発生し、警戒レベルは2009年4月29日にフェーズ5まで引き上げられた。5月12日時点では、30カ国、5251例の感染例がWHOに報告されている。
55	新型インフルエンザ	厚生労働省健康局結核感染症課事務連絡2009年4月26日	メキシコ及び米国におけるブタインフルエンザ事例に対する対応について
56	新型インフルエンザ	厚生労働省 新型インフルエンザに関する報道発表資料 2009年5月16日	兵庫県神戸市における新型インフルエンザ(インフルエンザA/H1N1)が疑われる患者発生についての報告。国内最初の新型インフルエンザ患者が確認された。患者は10代後半の男性。本人に渡航歴はない。国立感染症研究所からの検査の結果、A型(+)、ヒトH1(-)、ヒトH3(-)、新型H1(+))であったため、新型インフルエンザ(インフルエンザA/H1N1)が否定せず、新型インフルエンザが疑われる患者として神戸市に届出があった。患者は感染症法に基づき、神戸市内の感染症指定医療機関に入院した。
57	鳥インフルエンザ	Arch Virol 2009; 154: 677-681	ブタから分離されたH5N1インフルエンザウイルスの病原性を検討した。ブタ由来H5N1ウイルスは鶏卵胚およびMDCK細胞でよく増殖することが確認された。また、マウスに対する病原性では、ニワトリ由来のH5N1ウイルスに比べて病原性が低い或いは弱毒であることが示された。
58	鳥インフルエンザ	Avian Diseases, Vol.52, No.1, p40-44, 2008	ニワトリに実験的にH5N1インフルエンザを感染させ、気管と種々の組織におけるウイルスの局在について解析した。と畜前の気管スワップの抗原検出試験は発症または死亡した感染ニワトリを同定するには役立ったが、発症前の検出感度は低かった。
59	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2009; 15: 272-279	2007年のドイツで発生したH5N1ウイルスの家畜農場でのアウトブレイクの起原と、食物連鎖へH5N1ウイルスが侵入した疑いを調査するために、系統的解析と疫学的解析を実施した。その結果、市販の冷凍貯蔵されたアヒルの肉が原因である可能性が示唆された。アヒルが高病原性H5N1ウイルスに感染しても臨床的に無症候であることが示された。
60	鳥インフルエンザ	Emerging Infectious Diseases Vol.14, No.8, 1303-1305, 2008	2006年2月から8月にHN51型インフルエンザウイルスのアウトブレイクが起こったカンボジアの3つの村で土壌表面のスワップ、貯水池の水中植物、死亡した家禽等の環境調査を実施した。14世帯領域から採集した77サンプル中27サンプル(35%)がrRT-PCRによりH5N1陽性であることが確認され、家禽飼育場所の定期的な消毒の必要性が示唆された。
61	鳥インフルエンザ	J Virol Methods Vol.149, No.1, 180-183 2008	自然水レザバー中の超低濃度インフルエンザウイルスを検出する簡便法を開発した。ニワトリの全血から分離した赤血球細胞を用い、細胞表面のシアリルリセプターに対するウイルス結合と凝集による濃縮を行い、鶏卵胚で培養後ウイルスを検出した。検出感度と確率をPCR法と比較した。
62	鳥インフルエンザ	OIE/World animal health information Vol.22 No.10 2009/03/05	2009年2月27日、愛知県豊橋市のうずら農場においてトリインフルエンザウイルス(H7N6)が検出された。感染農場、周辺地域では家畜の移動制限、殺処分が実施され感染拡大防止措置が取られている。ヒトへの感染は認められていない。感染源は不明。